

29 『口歯類要』における歯痛に関する 考察

西卷¹⁾ 明彦・寺師²⁾ 睦宗

薛己編著の『口歯類要』（二巻・一五二九年）は、中国伝統医学において、口腔医学専門書としては数少ない一つである。一般に口腔に関する記載は、全体の中で一章として記述されていることが多い。口腔に関する専門書としては、『漢書芸文誌』によれば、張仲景の『口齒論』一卷が存在すると述べられているが、今日では伝承されていない。今回、『口歯類要』の歯痛第三について考察を行った。底本は内藤記念くすりの博物館所蔵の『口歯類要』、一九八三年人民衛生出版社版『口歯類要』によった。

『口歯類要』歯痛第三は、その原因論と治験から構成されている。中国伝統医学で、歯痛に関する記載は古く、『武威漢代医簡』にまでさかのぼり、『武威漢代医簡』では、歯痛の原因として経脈説、虫蝕説の二つの考え方が

あったことが述べられている。歯痛の病理論について、巢元方の『諸病源候論』（六一〇年）において、二十一門の歯痛のうち十六門は風によるもの、蟲によるものが四例、外傷によるものが一例であった。戸出一郎氏によれば、「歯痛を主訴とする歯牙疾患、即ち風歯・齲歯・牙歯病は疾病の経過或は軽重からいえば、歯痛が最も軽く、次いで風歯・齲歯の順序で重篤になっていくのである。」と述べ、さらに「諸病源候論」ではこの順序に配列されているが『医心方』では風歯・齲歯・牙歯痛の順序となっている。『外台秘要方』ではおおむね牙歯痛・齲歯・風歯の順になっている。」と記している。一般には、唐代までは歯痛の原因として風が挙げられることが多かったと考えられるが、『口歯類要』では、風の他に湿熱、虚熱、気虚、胃火、大腸熱、諸経錯雜の邪等、さまざまな病因論を挙げている。また、「歯は寒熱を悪む等の症は、手足陽明経に本づく。其の動搖脱落するは足の少陰経に本づく」と、『靈樞』の経脈編をそのまま引用しており、「歯は腎の標、口は碑の竅」については、『素問』の概念を採用している。『靈樞』においては、下の歯は、手

の陽明大腸経、上の歯は、足の陽明胃経に関連があると思われられているが、臨床的には両者が錯綜することが多く、『口齒類要』では、『靈枢』での概念を省略しているのか、臨床的立場にたっているのか、いずれかであると考えられる。さらに『諸病源候論』に見られる多岐にわたる病名は記されておらず、外科的処置は、ほとんど記載されていない。薛己は、『外科枢要』(一五七一年)などでも、内科的な托・補法を得意としており、『口齒類要』も、その概念が反映されている。『口齒類要』とほぼ同時代の陳実功の『外科正宗』(二六一七年)では、歯病の原因として、風・火・陽明の湿熱の三種類を挙げているが、気虚に関しては取り挙げていない。後代の口中書においても、気虚に関して取り挙げることは少なく、有持桂里の『稿本方輿輓』(十九世紀)で、「俗に気歯と云あり、是は華書にもなきことなるが。」と記し、気虚による牙齒病は、もつとも多い虫歯の原因と挙げ香附縮砂の葉をすすめている。現代中医学は、歯痛の主な原因として、風熱、風寒、胃火、虚火、腎陽虚などを挙げている。

治験には、補中益氣湯を処方することが多く、また柴胡剤を使った治験が多い。このことは、現代歯科臨床においても、歯周病、あるいは、不定性歯痛が、補中益氣湯で奏効することが多く、『口齒類要』は、現代歯科臨床でも有益な書であると言える。

『口齒類要』の歯痛第三は、経脈説を中心として歯痛の概念が記述され、その原因として前時代からの風論に加え、火、湿熱の原因説の他に、氣の原因を新たに加えたことが、特徴とされる。

(¹) 日本歯科大学新潟歯学部医の博物館

(²) 慶應大学医学部